

皇太子アレクセイ事件

— その史学史的考察 —

土 肥 恒 之

はじめに

16-18世紀のいわゆる「絶対王政の時代」において、王位（あるいは帝位）が父から長子へ「順当に」移譲されるのは寧ろ例外であった。「太陽王」として歴史に名を刻んだフランスのルイ14世（在位1643.5-1715.9）は、息子と男孫に恵まれ、王位継承にはいささかの不安も抱いていなかった。だがその晩年の1711年以降、王太子の病没と孫のブルゴーニュ公と公の次男の病没、孫のベリー公の事故死と不幸が続いた。こうして国王の後継者は4歳の曾孫となり、14世の弟の息子オルレアン公が摂政の地位についたことが知られている。他方で1711年に天然痘で病死した兄の帝位を引き継いだハプスブルク王朝のカルル6世（在位1711-1740）は、「男系が断絶した場合に女系への継承を認める」条項を含む『国事詔書』（1713）を制定した。だが案の定、彼は男子の後継者を得られず、1717年に生まれた長女マリア・テレージアが彼の死にともない、事実上の君主、「女帝」となった。1740年のことだが、その機にプロイセン国王フリードリヒ二世（大王）はシュレージエンに侵攻し、これを奪い取ったのである。だが大王自身、王太子のときに逃亡事件（1733）を引き起こし、父の「軍人王」の手を煩わせたことも広く知られている。イギリスの場合は更に複雑である。スチアート朝の女王アン（在位1702-1714）の死亡によって即位したのは、「遠縁の」ドイツのハノーヴァー選帝侯の長男であった（ジョージ一世）。この「外来王朝」に対する不満は「ジャコバイト運動」を活性化させた。つまり「名誉革命」（1688-89）で王位を追われたステュアート朝のジェイムス二世（及びその息子と孫）の王位継承

権を主張する運動、反乱が引き起こされたのである。ロシアでも事情はよく似ている。1718年6月26日（旧露暦。新暦では7月6日）、ピョートル大帝の息子アレクセイの獄死で幕を閉じた皇太子事件は、新しい帝位継承法の発布にいたるが、その後「宮廷革命」を繰り返し、結果として「女帝の世紀」を生み出したのである。

さて小稿が対象とする「皇太子アレクセイ事件」については、後進的なロシアの急速な近代化、「西欧化」をすすめたピョートル大帝と「反動的な」息子アレクセイとの個人間の確執として描かれてきた。このような事件像に決定的な影響を及ぼしたのは帝政期の歴史家ニコライ・ウストリャーロフの『ピョートル大帝治世の歴史』第6巻（1859）であり、その該博な史料（皇太子の逃亡先のウィーンの文書館史料を含む）の基づく研究として長く通説とされてきた。他方で1917年以後形成されたソヴィエト史学でも、基本的にはウストリャーロフに依拠して描かれてきた。皇太子を支持する名門貴族たち、つまり「反動的反対派」（reaktsionnaya oppositsiya）の存在が知られてはいたが、そうした敵対関係が特に重視されることはなかったのである。ピョートル帝生誕300年以降、『ピョートル一世（大帝）』（1975, 1990）や『ピョートルの巢のひな鳥たち』（1984, 1994）はじめ多くの伝記的著作をだしている優れた18世紀史家ニコライ・パヴレンコの場合もほぼ同じ視点に立っていた。ここでの問題となるのは晩年に著された『皇太子アレクセイ』（2008）である。彼の見解は君主権力と貴族との対立を第一義的とはみなさない旧ソヴィエト史学の立場を引きずっているが、テーマの性格上「反動的反対派」についてもかなり詳しく論及している。以下ではウストリャーロフとパヴレンコという新旧二人の歴史家の皇太子事件についての見解、特にその相違点を具体的にあきらかにすることで、「歴史家の立場」についても考えることにしたい。

(一) ニコライ・ウストリャーロフの皇太子事件研究

ニコライ・ウストリャーロフは1805年の生まれで、父親はオリョール県マロアルハンゲリスキー郡にあるクラークン公爵の領地管理人をしていた。つまり「農奴」身分であるが、家は比較的富裕であったという。ニコライ少年は県のギムナジヤを経て首都ベテルブルクに上京した。そして1821年に開設されたばかりのベテルブルク大学00学部に入學したのである。卒業後は財務省に入るが、7年間の役人時代に官位の昇任はなかったという。「時間潰しに」彼は偶々手にした「動乱」時代（1598-1613）に関する同時代のフランス人の報告をロシア語に翻訳していた。その出版が転機となり、1827年にギムナジヤの歴史教師に採用されたのである。3年後にはベテルブルク大学の講師に迎えられ、ロシア史と世界史の講義を担当した。ロシア史担当の教授はロゴフ（Rogov, 1789-1831）であった。ウストリャーロフも学生時代にその「凡庸な」講義を聞いたことがあったが、1831年流行のコレラで亡くなったのである。ウストリャーロフは三巻本の『為のドミトリーについての同時代の記録』を刊行する等史料研究に没頭していたが、1834年に新設されたロシア史講座では員外教授に任用された。そして翌年30歳の若さで正教授に昇任したのである。^①

1830年代から1840年代にかけて、ウストリャーロフは大学で最も人気のある教授の一人であったという。ある学生の回想によると、「教授の発声はモノトーンで、講義は生きいきとしたものではなかったが、これらすべての欠点は多くの事実と細部の伝達によって帳消しにされた」。ウストリャーロフは「他の教師とは違って、学生たちに気に入られようとはしなかった。当時流行していた講義のなかでの拍手喝采は、彼にはあきらかに気に入らなかった」。

ウストリャーロフは1836年に学位請求論文を刊行した。タイトルは『実践的なロシア史のシステムについて』^②で、歴史学の方法を論じたものである。「実践的」(pragmatichesukii) とは、著者によると因果関係を明らかにす

るという意味だが、従来の歴史研究の方法に対する批判を意図していた。例えばカラムジンの著名な『ロシア国史』全12巻（-1825）は、ツァーリや大公たちの「伝記の集成」にすぎない。国家だけでなく、「社会生活、私生活」を含めて、「ひとつの状態から他の状態への社会の移行」を明らかにしなければならない。もとよりこの移行の「責任者」（vinovnik）は、自己の希望と期待を実現しようとするナロードでも社会でもない。歴史を創造するのは「上位権力」であり、「責任者」とはツァーリ自身に外ならない。「移行」や「変革」は「一人の人間の思想と意志」によって成し遂げられるのであり、ナロードはそれに従い、自己に与えられた分け前を神に感謝することだけが残される。

ところでウストリャーロフはロシア史教科書の著者としても知られる。というよりも最初の編纂者であった。^③ 彼の教科書の特徴は、ロシア人をひとつに結びつけ、彼等を新しい繁栄、力、そして栄光へと導く「専制」を賛美する「臣民的性格」にあった。つまりニコライ帝の治世方針をそのまま体現した教科書であった。「確信的な国家主義者」であった歴史家ウストリャーロフは、同時代人によって皇帝の方針をそのまま「実践」したと皮肉でもって批判された。ゲルツェンによると、彼の歴史教科書は「ウヴァーロフ大臣の図柄によって、ニコライ・パーヴロヴィチ帝のモチーフによって書かれた」ものだと批判した。^④ ウストリャーロフがピョートル大帝の治世について研究を始めたのは1842年頃で、以後15年間にわたって続けられた。この研究については以下で詳論するが、先の学生の回想によると、このテーマへの熱中のために講義は全体として精彩を欠いていたが、大帝の時代については「若干生きいきとしていた」。だが1855年2月クリミア戦争の敗色濃いなかで、ウストリャーロフの支柱でもあったニコライ帝が亡くなった。そして若きアレクサンドル二世の即位とともに、「雪解け」が始まって大学の空気も一変した。「公的ナロードノスチ」のイデオロギーの縛りが解けて、リベラルな風が吹き始めた。ウストリャーロフの講義に出席する学生もいなくなった。彼が大学を辞めて年金生活に入ったのは1864年のことだが、長期にわたる勤

務にも拘わらず、名誉教授の肩書を得られなかったという。ウストリヤーロフの後任に選ばれたのはニコライ・コストマーロフ（Kostomarov, N. 1817-1885）であった。

『皇帝ピョートル大帝の治世の歴史』^⑤

ウストリヤーロフがピョートル大帝の歴史研究に取り掛かったのは、先述したように1842年頃とされるが、その理由は知られていない。大帝が創建した首都の大学のロシア史講座の正教授としての当然の役割、自覚なのかもしれない。それは兎も角、当初の構想では全10巻が予定されていた。問題はアルヒーフ、つまり未刊行文書の利用であるが、立場上彼はきわめて恵まれていた。1842年11月に文部大臣ウヴァーロフを通して、国内の「秘密のアルヒーフ」に利用が特別に許された。つまり外務省、皇帝官房、宗務院、元老院、陸海軍の各アルヒーフへの入庫が認められたのである。更に重要なことは、オーストリアのウィーンのアルヒーフの利用について、外務大臣ネッセリローデの世話でメッテルニヒの許可が得られた。ウストリヤーロフがウィーンの文書館で調査に当たったのは1845年のことであるが、1849年文部大臣のウヴァーロフが失寵した。後任のミリンスキー・シフマトフ（在任1849-1853）はより保守的な人物で、「検閲によるテロルの時代」ともされる。^⑥ ウストリヤーロフの著作の刊行の是非は彼の手委ねられたのである。1850年『ピョートル大帝』の第一巻の手稿がニコライ帝に提出された。ニコライ帝は出版を認めたが、文部大臣は五ヶ所の「潜在的な難点」を指摘した。そして印刷は予定のすべての巻の用意ができるまで延期されたのである。だがニコライ帝は1855年2月病没した。ウストリヤーロフにとっては痛手であったが、出版という点では寧ろ幸いした。アレクサンドル二世の即位とともに、「雪解け」が始まり社会の風向きが変わったからである。官房第二部長官は刊行助成金の申請を認め、1856年9月検閲も通った。こうして1858年に最初の三巻が刊行されたのである。翌年皇太子事件を扱った第6巻が、そして4年後に第4巻が刊行された。ポルタヴァの戦いを扱った第5巻は検閲を通らず、手稿が残された。^⑦

ウストリャーロフの本書についての後代の歴史家たちの評価はほぼ一致している。その第一の価値はアルヒーフから多くの貴重な記録を引き出した点にあるというものだが、参考までに各巻のサブ・タイトルとページ数（史料のページ数）を以下に挙げておこう。

第1巻「皇女ソフィアの支配」400ページ（うち付録史料85ページ）

第2巻「遊戯連隊とアゾフ遠征」582ページ（同上、188ページ）

第3巻「旅行とスウェーデンとの決裂」652ページ（同上、133ページ）

第4巻「ナルヴァの戦と勝利の始まり」第一部611ページ（同上、58ページ）

第4巻、第二部、本文なし（付録史料672ページ）

第6巻「皇太子アレクセイ・ペトローヴィチ」628ページ（同上、333ページ）

付録として収録された諸史料は、本書全体の約45%、半分近くを占めていた。本文の叙述に関連する史料はすべて付録として収録されたのである。1847年にモスクワ大学の員外教授となり、『最古代からのロシア史』を刊行していたソロヴィヨフ(Solovief, S.M 1820-1879)は、ピョートル帝に必要なのは「歴史」であって、「頌詩」ではないとしながらも、膨大な史料を集めた本書の学問的重要性を認めている。^⑧ 他方でペテルブルク大学のベストジェフ・リュージン(Bestzev-Ryumin, K.N 1829-1887)の評価は両面的である。本書全体については「公式の歴史学の要求にあまりに隷属的」とする一方、ウストリャーロフの第6巻によってロシアの歴史家の手に「皇太子事件に関するほとんどすべての記録」が残されることになったと高く評価したのである。ウストリャーロフのピョートル大帝史研究のなかで「皇太子事件」を扱った第6巻は、みずから手で調査・発掘した数多くの文書館史料に依拠していた。「皇太子事件」についてはウストリャーロフの所説が長く踏襲された理由の第一はこの点にあるのである。

では著者は如何なる事件像を描いたのだろうか。以下では正確を期すために、要約ではなく、同時代に出たウストリャーロフの『ロシア史』（第5版、1855）の一節「ピョートル大帝」のなかから、当該箇所「皇太子アレクセイ」を全訳しておくことにしよう。^⑨

「ピョートル帝とロープヒン家の出自の最初の妻エウドキヤとの間に生まれたアレクセイは、成人まで両親の優しい愛情と信頼を受けていた。古きものへの過剰な愛着のために修道院に送られた母親の災いは、もちろん父と子の関係にいかなる影響も及ぼさなかった。ピョートル帝はアレクセイを自分の後継者とみなして、彼の養育にあらゆる手段をとった。皇太子が10歳になったとき、君主は教育プランを書き、家庭教師を選んだ。後者のなかにはギースン男爵がいた。

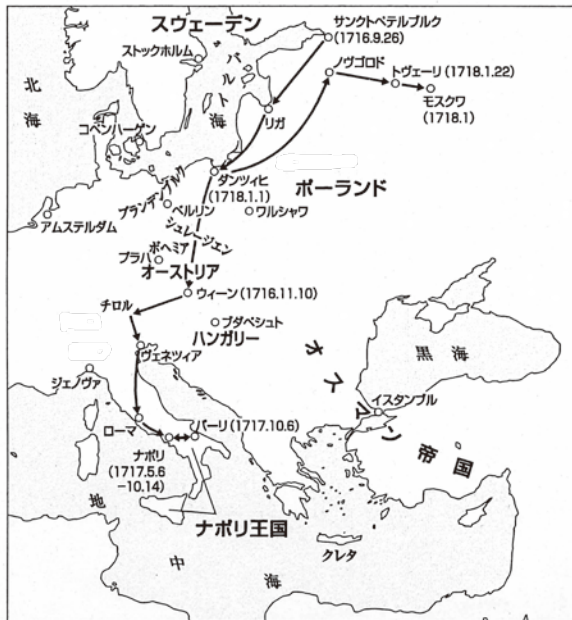
そしてその教育プランのより良き執行役としてメーンシコフ公爵に養育のおもな監視を委任した。ピョートル自身も息子の道徳的能力の発達に配慮した。彼を科学と芸術の重要性の認識に駆り立て、遠征や旅行に伴った。アレクセイが成人に達したとき、君主の不在時にはあらゆる国事についてアレクセイに報告するように大臣たちに命令された。だがすべては無駄であった。ピョートル帝の言葉によると、良き種子は石のうえに落ちた。皇太子は知性と能力、そして良き心を持っていた。だが多くの状態の成り行きによって、父によって示された道から逸れ、ピョートル帝が高く評価していたすべてのものを嫌悪して、父の偉大な創造物を一掃することを考えた。こうして君主と祖国に対する犯罪者として破滅したのである。

アレクセイの不幸の最初の罪は母親にあった。古い習慣へのエウドキヤの盲目的な愛着は皇太子の知性に深い痕跡を残した。9歳まで彼女のもとにいたアレクセイは、父の事業の都合の悪い側面をみることに慣れていた。皇后との離別（1698）によって、ピョートル帝はまだ彼により良い方向を与えることができた。だが不幸にも、皇太子の知的及び道徳的な能力の発達はスウェーデンとの困難な戦争の時期におこなわれた。その当時ピョートル帝もメーンシコフも彼を監視する可能性を持たなかった。皇太子の取り巻きの拙い人選が残りやを仕上げた。ドゥブロフスキー、キキン、そして他の旧習の密かな帰依者たちは、ピョートル帝がアレクセイの母親の迫害者であること、すべての革新は国家に害悪をもたらすこと、ナロードの間では全般的な不満が支配していることを絶え間なく吹き込んだ。皇太子は外国のいかなるもの

にも耐えられず、科学を憎み、怠惰と自己の愛人たちとの不快な遊びに時間を費やした。そして干からびた魂で、父の忠告を聞いた。その際、彼は自己の感情を隠すことができた。君主はアレクセイの不愉快な傾向に気付いたが、そのときはそれを根絶するのは困難であった。だがピョートル帝は息子の矯正に絶望することなく、時には脅しでもって彼を高いポストに据え、教育の必要性についての考えを目覚めさせようと努力した。また皇太子に啓蒙の果実を享けさせるためにドイツ旅行に派遣して、同時にドイツの公女から妻を選ぶように命じた。アレクセイは知性、心、美貌で秀でていたブラウンシュヴァイク・ヴォルフエンビュッテルのシャルロッテを選んだ。ピョートル帝は喜んでこの結婚に同意して、知的で温和なシャルロッテが自分の夫に道理を弁えさせる期待を抱いたのである。

だが事態はべつの方向に進んだ。アレクセイが彼女と仲良くくらししたのは長くはなかった。彼はいつも彼女を嫌い、悲しませるようになり、そうした自分の行為によってピョートル帝を怒らせた。君主は彼と話し合い、会うことも望まなかった。ついにシャルロッテが男児を出産して、病気よりも多くの憂いのために世を去ったとき、ピョートル帝は最後の期待を失った。愛する嫁のあまりに早い逝去に悲嘆にくれたピョートル帝は、葬儀の日に息子に厳しい手紙を書いた。それはアレクセイに矯正を求め、反対の場合には帝位継承予定者から解任するというものであった。アレクセイは自分を国家統治に無能と感じていること、したがって修道院に入ることを望むと回答した。君主は彼に考える時間を与えて、自分は外国へ出掛けた。指定の時間が過ぎたとき、ピョートル帝はコペンハーゲンの自分の元に来て説明するように求めた。アレクセイは旅立った。だが彼はコペンハーゲンに着く前に姿を隠した。近衛連隊大尉のルミャンツェフが彼の隠れ家を見つけるまで、誰もアレクセイに何が起きたのか知らなかった。皇太子はオーストリアへ行き、父親に対する不満と意に沿わない剃髪から自身を救ってほしいとの懇願をもってドイツ皇帝（カール6世）の前に現れたのである。皇帝は彼をチロルに、その後ナポリのセント・エリノに匿った。

だが我が宮廷の強硬な意見は、オーストリアによる皇太子庇護を余儀なく諦めさせた。トルストイが皇太子をモスクワに連れ戻し、そこでピョートル帝は彼を帝位（皇太子）から罷免し、さらに彼の行動を調査するための委員会を設けた。もし皇太子が何事も隠さず、自分のすべての「仲間」を明らかにするならば、彼にいかなる罪があっても、君主の赦免を約束したのである。皇太子は皆の前で宣誓したが、怒る父親を欺いた。委員会はアレクセイが発言を望まない多くの事柄を暴露した。つまり彼は君主について暴言を吐いていたこと、ピョートル帝の死を望んだこと、父の死後彼に「帰依する」すべての高官を根絶すると脅したこと、戦争とナロードの叛乱の噂を喜んだことが明らかにされたのである。ドイツ皇帝を謗り、さらに重要なことには、ウィーンから元老院議員と府主教宛ての手紙を準備したことである。その他に、彼の犯罪的な意図は母親のエウドキヤと叔母のマリヤ、および多くのも



アレクセイの逃亡・帰国の経路（略図）。年月日は旧露曆。

のに知られていたことがわかった。全体として、アレクセイは宣誓に反して真理を隠し、支離滅裂な返事をして自分の「帰依者」を救おうとしたのである。こうした頑固さはピョートル帝をゾッとさせた。悔恨とは無縁な彼の息子は見せかけで帝位を拒否しただけで、ロシアを支配する望みを育み、改革にとまなう根本的な変化を根絶しようとしている、とピョートル帝は理解した。ピョートル帝は「祖国の前で」父の感情を抑えて、アレクセイを144名からなる裁判に委ねた。そのなかにはすべての元老院議員と高位聖職者が入っていた。裁判は皇太子に関するすべての事件と審理を検討した後、彼に祖国、父親、そして君主に対する犯罪者として死刑を宣告した。アレクセイは恐怖でもって判決を聞き、無表情になって、その日のうちに亡くなった。

皇太子の不幸な事件は重大な結果をもたらした。ピョートル帝はロシアの運命についての無限な配慮から、このような事件が繰り返されることを恐れて、君主が自己の適切な判断によって、帝位継承（予定）第一位という古来の権利によって狭められることなく、それに相応しいものを任命する権利をもつというマニフェストを示した。このような我が祖国の基本法の廃止は、パーヴェル帝がロシアの運命を保障する賢明な帝位継承の正しい秩序を規定されるまで、多くの混乱の原因となったのである。^⑩

以上のように、ウストリャーロフにとって皇太子事件とは祖国の繁栄に尽力するピョートル帝に対して、その意志に逆らった息子の皇太子との間におきた個人的な闘いであると結論された。著者はピョートル大帝の「息子への愛」を上回る「祖国愛」を強調したわけだが、この事件像について、初めて正面から厳しく批判したのはソヴィエトの歴史家ではなく、現代アメリカのロシア史家ブシュコーヴィチであった。彼によると、「専制的なニコライ一世の家の歴史家」、つまり宮廷歴史家であったウストリャーロフは、即位とともに「貴族のフロンド」ともいべきデカブリスト蜂起に直面した主人の意向を挺して、事件の歴史を書いた。言い換えると、この事件には改革反対派の名門貴族の存在が見え隠れするのだが、そうした問題への言及がツァーリの栄光を減じ、専制の基盤を掘り崩すものとして、「出来るだけ隠さなけ

ればならなかった」。すでに知られている場合でも、それを誇張してはならないというのがニコライ帝とその時代の公的な立場であった。ウストリャーロフの本はそうした「ツァーリと政府の監視下で書かれた」のであり、以後「150年にわたって歴史家たちを欺いた」のだ、と厳しく批判したのである。^⑩この点については、最後に改めて見ることにしたい。

さて画家のニコライ・ゲー（1831-1894）は移動美術展の第一回展覧会（1871）に『皇太子を審問するピョートル帝』を出品した。この絵画は翌年5月末にモスクワで開催されたピョートル大帝生誕200年記念の「工芸博覧会」にも展示されたが、9月までに入場者は75万を超えたという。他方で革命後に亡命した作家ドミートリー・メレシコフスキー（1866-1941）は、『ピョートルとアレクセイ』（1903, 04）を発表した。こうした絵や作品を通して、皇太子事件像はさまざまに形成されていった。^⑪

（二）ニコライ・パヴレンコの皇太子事件研究

1917年の「十月革命」後に形成されたソヴィエト・マルクス主義史学は、その担い手の養成から始めなければならず、ピョートル期についても本格的な研究活動は1940年代以降であった。「偉人伝叢書」の一冊として刊行されたマヴロージンの『ピョートル一世』（1948）は^⑫、その後のピョートル伝のひな型をなしたが、研究の本格化を示すのは、「ソヴィエト連邦史」シリーズの一冊として、1954年に刊行された『封建制期。18世紀第一四半期のロシア。ピョートル一世の改造』^⑬である。「序文」（カーフェンガウズ）に引き続き、「生産諸力と社会・経済体制」「階級闘争」「貴族・官僚帝国の形成。ロシアにおける絶対主義に形成」「対外政策」「ロシア文化」の五章からなる大型本で、ソヴィエト史家20名の総力を結集した814頁の大著であった。各々の節についてペレストロイカと1991年12月のソヴィエト解体までの30年余りに詳細な研究が進められたわけだが、この本で短い「結論」を書いたのがニコライ・パヴレンコである。以下では彼の略歴とピョートル改革論をみるこ

とから始めよう。

ニコライ・パヴレンコ（1916–2014）は「十月革命」前夜の生まれで、ロストフ・ナ・ダヌーの教育大学を経て、1936年にモスクワ古文書学院に入学した。三年後大学院に進むが、ナチス・ドイツとの戦争が始まり入隊、学業は一時中断された。戦後パヴレンコはピョートル帝の製鉄業政策を統括する中央官庁である「鉱山参議会」についての研究に従事し、1953年に博士候補生論文が刊行された。1962年には18世紀ロシア全体の製鉄工業を扱った分厚い専門書が刊行され、近世ロシア社会経済史家としての地位が確立された。1960年代のロシア資本主義起源論争においては、多くの研究者がレーニンの「新しいロシア（ほぼ17世紀から）」の命題に依拠して17世紀起源説を主張したのに対して、パヴレンコ等の少数派は18世紀後半を主張した。更にロシア絶対主義をめぐる論争でも、その起源についてブルジョワではなく、貴族層と士族層の対立という契機を重視したのである。

1972年はピョートル生誕300年にあたった。記念論文集の企画が始まり、『ピョートル一世改革期のロシア』^⑤が刊行された。編集責任者の一人として、パヴレンコはピョートル帝の「社会政治的見解」を明らかにする60頁余りの本格的なピョートル論を書いた。そしてこれを契機にして、パヴレンコ（当時56歳）はピョートル帝とその周辺の人物についての伝記研究に大きく舵を切ったように見える。3年後の1975年に「偉人伝叢書」の一冊として『ピョートル一世』（発行部数10万）が刊行され、15年後の1990年に本書の増補版といえる『ピョートル大帝』（592頁）が刊行された。「ロシア官僚制の起源」「公共善」が加えられたため頁数は旧著の1.5倍となるが、大判の本になっているからほぼ2倍の分量である。内容的にも新章が加えられている。これに続いて、『ピョートル帝の巢のひな鳥たち』（1984）、『エカテリーナ大帝』（1999）、等が書かれた。^⑥

パヴレンコは最初の『ピョートル一世』で皇太子事件について、「父と子」のタイトルで比較的大きなスペースで扱っていたが、増補版では「家庭の悲劇と帝位」として、ほぼ二倍の分量である。だがその主旨に大きな変更はな

い。そこで『皇太子アレクセイ』^⑩だが、目次は以下の通りである。

第一章「皇太子の子どもと青年の時代」

第二章「」

第三章「逃亡」

第四章「逃亡者の帰還」

第五章「モスクワの搜索」

第六章「最初のスーズダリ搜索」

第七章「悲劇の終幕」

以下ではパヴレンコの理解を三点に要約・整理するが、本筋と関係ないところでは、パヴレンコの他の著書も参照して論旨を補っておいた。

皇太子アレクセイは「視野の狭い女性」である母親エウドキヤと聖職者たちの精神的影響をうけて育った。伝統的な古い見解をもつ彼らはピョートル帝の行動を非難していたし、最初の家庭教師ヴァゼムスキーも知識も教育力もない人間であった。ピョートル帝は皇太子を外国で教育させることを望んだが、北方戦争の勃発のために、留学はポルタヴァ後の1709年まで延期された。受け身で怠け癖のある皇太子の三年間のドイツのドレスデン留学は無益に終わった。帰国後ピョートルみずから彼に試験を課そうとしたが、アレクセイは銃で自分の手を撃ってそれを回避した。アレクセイが仲間のなかで最も信頼を寄せていたのは「聴聞司祭」のイグナチェフであった。彼は皇太子とたえず手紙を交わしており、心に秘めた「秘密」を知る人であった。リヤザン府主教ヤヴォルスキーが行政監察官（フィスカール）制度を導入するピョートル帝を批判して、皇太子に強い期待をかけた説教をした噂を耳にしたアレクセイはその詳しい内容を求めた。また皇太子は父帝側近のメーンシコフ死亡の噂を聞いて、「暗号で」詳細を報せるように求めた。アレクセイの手紙のなかでしばしば使われた「秘密で」という言葉は、外部の眼、とりわけみずからの行動を父帝から隠すという強い志向を証明している。

ピョートル帝は修道士や中傷家へのアレクセイの依存、そして国事に対する皇太子の怠慢と無関心に不満をもっていた。個々の「誤り」には寛大であつ

だが、「精励の欠如」による「失敗」は容赦しなかったのである。こうして親子の疎遠な関係はますます大きくなった。仮病を用いて勤務をサボり、過度の飲酒に身を委ねるアレクセイの周囲には父帝の改革に非難を浴びせる「飲み仲間」がいた。1711年10月皇太子は結婚したが、彼の生活になんら変化をもたらさなかった。相変わらず飲酒に浸り、更に元の家教師ヴァゼムスキーの農奴の娘エヴロシニアを愛人として囲った。1713年からアレクセイは新首都ペテルブルクに住むことになった。相変わらず昔の仲間囲まれていたが、今度はアレクサンドル・キキンが彼の「主要な助言者」となった。キキンはかつてピョートル帝の側近として仕えていたが、公金横領の罪で流刑された人物であった。キキンは「復讐心をもって」アレクセイに近づいたのである。

アレクセイの「平穏な生活」は、1715年秋の一日に突然破られた。出産後の経過が思わしくなかった皇太子妃は10日後に亡くなった。その葬儀のあと、ピョートル帝はアレクセイに手紙を渡した。そこにはこれ以上怠惰な生活を続けるならば、「自分の役立たずの息子よりも、他人のより良いものに」後継者を譲ると記されていた。継承権の剥奪という脅しで生活態度の刷新をよく求めたのである。アレクセイは直ぐにキキンと相談した。彼らが出した結論は「よわい身体」を理由にした帝位継承権の辞退であった。だがピョートルはこの返事を疑った。より明確な回答を求めると、アレクセイは修道院入りを伝えたのである。翌16年2月、ピョートル帝は遠征にでる前に直接アレクセイと会い、半年後までに遠征先のコペンハーゲンに回答を送るように求めた。その外面的な恭順とは裏腹に、アレクセイには修道院に入る意志はまったくなかった。間もなく側近キキンが皇太子の隠れ家探しのためにウィーンへ向かった。1716年9月末、アレクセイは父帝の下に出掛けると偽り、愛人等数名と馬車でペテルブルクを発ったのである。

11月10日ウィーンに着いたアレクセイは、亡き妃シャルロッテの姉の夫君にあたるカール6世の庇護を求めた。シェーンボルンの館でアレクセイは、脈絡もなく父帝とエカテリーナ妃、メーンシコフに対する不平を述べた。更

に自分には統治するための十分な能力があり、修道院に入るつもりはないと皇帝カールの庇護を求めたのである。ウィーン政府は困難な状況に立たされた。アレクセイへの隠れ家の提供は究極的にはロシアとの軍事的衝突を引き起こしかねなかったが、ひとまずチロルの山城に移送された。政治的な取引材料とする狙いもあったからである。足跡を絶った皇太子に対して、ピョートル帝は直ちに搜索を指示したが、そこにはウィーンも含まれていた。ついに隠れ家を突き止めたロシア使節と接見したとき、カール6世は言葉を濁して知らない振りをしたという。ピョートル帝は当時64歳の老練な外交官ピョートル・トルストイをウィーンに派遣して、事態の最終決着をはかった。トルストイは20年前にナポリに滞在した経験があり、イタリア語に通じていた。^⑧ 巧みにウィーン政府に迫り、ナポリの隠れ家に移された皇太子との面会の許可をとりつけた。「皇帝の庇護」を信じて疑わないアレクセイに対して、トルストイは粘り強く説得した。もし帰国の指示に従わなければ、「反逆者」とみなされ、ロシア軍が派遣される。ピョートル帝がナポリに現れるだろうというトルストイの脅しにアレクセイは震え上がったという。父から「赦し」を得て、今後ロシアの何処かの「村に、(妊娠中の)エヴロシニアと一緒に住む」という条件で、巡礼地バーリを経てナポリを後にしたのである。^⑨

最後に、1718年1月末にモスクワに帰還したアレクセイは、2月3日元老院議員、高位聖職者、「ゲネラリテート」と呼ばれる政府高官たちが控えるモスクワの宮殿の大広間に連れ出された。その場で彼はピョートル帝に膝まずいて赦しを請い、正式に帝位継承権の放棄に同意した。目撃者の証言によると、ピョートル帝はアレクセイに次のように問いかけた。「何故お前はわたしの警告を聞き入れなかったのか。誰がお前に逃げるように助言したのか。この問いに対して皇太子はツァーリに近寄り、耳元で何かを話した。二人は隣の部屋に退いた。そこで皇太子は自己の共謀者の名前を挙げたものと思われる」。二人が隣の部屋から戻ると、相続権の剥奪について用意されていたマニフェストが公表され、アレクセイは新しい相続人(大帝とエカテリーナ妃との間の子で、当時3歳のピョートル・ペトロヴィチ)に宣誓・署名し

たのである。

こうして皇太子事件の被疑者たちの逮捕と取調べが始まった。2月6日皇太子の側近キキンが捕まり、投獄・拷問ですべての罪を認めた。5月14日に処刑され、すべての動産・不動産が没収された。皇太子の「従僕」は「密告」をしなかったため処刑され、館の管理者もトボリスクへ流刑された。「我々すべては、ナロードに多くの重荷があるために、彼の死を望んでいる」と語った司祭ヤコヴ・イグナチェフは破門後に拷問・処刑された。その他、逃亡の準備を知りながら「密告」しなかったか、後継者への期待を述べた廉で、元老院議員を含む数人の貴族が取調べを受け、後に解放された。ピョートル帝は息子が挙げた多くの名前を本気で取りあげなかったが、例外はドルゴルキー家、特にヴァシリー・ヴラジーミロヴィチ・ドルゴルキー（1667-1746）である。彼はピョートル帝がかつて「眼をかけた人物」で、「皇太子に誰よりも近かった」。1715年10月にピョートル帝から帝位継承権を剥奪する手紙を受け取ったアレクセイが直ぐに助言を求めたのがキキン、そしてヴァシリー・ドルゴルキーであった。彼は逮捕・拘束され、枷にはめられモスクワに護送された。彼の逮捕は古い家柄を誇るドルゴルキー家の人々に恐怖をひき起こした。一族の最長老で、ピョートル帝の尊敬を受けていたヤコヴ・ドルゴルキー（1639-1720）は、家の名誉と従弟のヴァシリーを守るために嘆願書を書いた。²⁹ ヴァシリーは取調べでアレクセイと対面させられ、「父に手紙を書き、自分の言葉で答えなさい」と助言しただけだと証言した。だがヴァシリーの弁明は信用されなかった。カザンへ流刑、官位の剥奪、財産没収の判決が下された。³⁰ このように名門貴族のなかの少数のものだけが取調べをうけ、処罰された。ピョートル帝の厳しい性格からみて、これは奇妙なことだが、理由は二点ある。一つはアレクセイの「証言」を同調者の広がりをはかるものとして、あまり信用していなかったことである。もう一つはヨーロッパ世界にアレクセイ支持者が大勢いるかのような「誤った印象」をつくりだすことを避けたためである。被疑者のなかには18年間修道院で生活していたピョートルの元妃エヴドキヤ（修道女エレナ）もいた。その修

道院にも捜索人が派遣されたが、彼女自身の「姦通」(prelyubodeyanie) 問題が発覚しただけで、事件とは無関係であることがわかった(スーズダリ審問)。

アレクセイ自身は最初の3ヶ月間は、監禁状態にあった。彼はある場合は真実を隠し、ある場合は他人に責任を押し付け、ある場合は「罪なきもの」を中傷した。エフロシニアは何も知らなかったと庇った。だが人々の証言は、彼が多くを隠していることをピョートル帝に確信させた。5月に入り、取調べの場はペテルブルクに移された。ここでもアレクセイは死の恐怖から嘘をいい、事実を歪曲し、そして自己の罪を最小化しようとした。だが4月末に出産、その後ペテルブルクに護送されてきた愛人エフロシニアの訊問と証言がおこなわれた(5月12日)。アレクセイは彼女に文化、慣習、行政機構などの父の改革をすぐに止めて「昔に戻る」こと、海軍も止め、ペテルブルクを棄てる。自分たちは「冬はモスクワで、夏はヤロスラーヴリで暮らす」等々の「脈絡のないお喋り」をしていた。だから父親が亡くなると、政府高官の呼びかけでロシアに帰り、その「ファンタスティックな計画」を実現する。すでに何人かの元老院議員や府主教には手紙を書き送ってある(オーストリアの役人に送付を依頼した手紙は出されないまま、ロシアの一人の歴史家ウストリアーロフがウィーンのアルヒーフで発見するまで、130年間眠ったままであった)。ロシアの高官たちの多くは父帝のそのキャリアを負っているが、帰国するとすぐに寝返るだろう。彼らはアレクセイにいつもお世辞をいい、社交上の微笑を欠かさなかったから、印象は悪くなかった。だがそれらもピョートル帝の眼を曇らせるものではなかった。

6月14日アレクセイの身柄はペトロパヴロフスク要塞に移され、今や「普通の囚人」として鞭打ちの拷問が加えられた。ピョートル帝は皇太子の最終的な処分を聖俗の高官たちの手に委ねた。人間は自分に関わる事件では、他人の関わるものよりも軽く見がちだというのがその理由であった。またウィーンからの帰国の条件として、ピョートルはアレクセイに「赦し」を約束していたから、自己のなかに矛盾を抱えてもいた。6月19日に25叩きの鞭

打ちの「拷問」をうけて、ようやく罪を認めたアレクセイに死刑判決が下された（6月24日）。判決書に127名の政府高官の署名もされた。だが処刑前の26日、アレクセイは獄中で亡くなった。父のピョートル帝が手をかけたのだという噂が流れたが、その辺のことは霧のなかである。翌日はポルタヴァ戦勝記念のお祝があり、29日は新しい軍艦の進水式が執り行われた。アレクセイの葬儀がおこなわれたのはその翌日であった。

（三） 結びに代えて—「反動的反対派」をめぐる若干の問題

上述のように、パヴレンコはソヴィエト時代の著作では「皇太子事件」を親子間に生まれた悲劇とみていて、「名門貴族の関与」については、ごく部分的な問題として片づけていた。だが晩年の『皇太子アレクセイ』ではこの問題を第一義的と意味づけられないまでも深く立ち入って分析した。あきらかにスタンスの変化が認められるが、これには現代アメリカのロシア史家ブシュコーヴィチの「影響」が指摘できる。本書は基本的には「注」のない読物ではあるが、文献一覧なかにはブシュコーヴィチが1999年『ロージナ』誌9月号に寄稿した「アレクセイ事件の新見解」²²を挙げていることから窺える。

もとよりソヴィエト史学がこれまで一律に、皇太子事件における「反対派」の軽視（あるいは無視）の立場であったとするのは正確ではない。例えばピョートル一世時代を対象とした先の『ソヴィエト連邦史』（1954）に収録されているクリイロヴァとアレクサンドロフの共同論文「反動的反対派との闘い」によると、審問のなかで名門貴族や高位聖職者たちがアレクセイの逃亡に「寛大な関係」にあったことを知って、彼らに対するピョートル帝の信頼が大きく揺らいだと指摘していた。事件に直接かかわらなかったものでも、責任ある部署から外すか交替させたことはそれを示唆するものである。名門貴族の一人ヴァシリー・ドルゴルキーが有罪とされ、官位の剥奪、財産の没収、そして流刑処分を受けている。処刑だけは免れたが、それはピョートル帝の寵臣で、一族の最長老であるヤコヴ・ドルゴルキーの「執り成し」があっ

たためであった。二人の著者はそこに「アリストクラシーに対するピョートルの譲歩」を見ているのである。²³ パヴレンコはこの共同論文に特に言及していない。

さて先述のウストリャーロフ批判論文を書いたブシュコーヴィチは、2001年にこの問題を全面的に展開した『ピョートル大帝—1671—1725の権力闘争』を著した。²⁴ タイトルはともかく、全体で本文440頁のうち、100頁余りをアレクセイ事件に費やした力作である。象徴的な部分だけを取り上げると、西欧への大使節団からの帰国後（1698）、ピョートル帝は旧来の貴族会議の招集を止めて、彼らが長官を務める中央官署（プリカース）をバイパスして政治決定をおこなった。つまり側近のメーンシコフやゴロヴィンに直接手紙を書いて指示を与えたのだが、間もなくそうしたやり方が間違いであることに気づいた。重要な局面では名門貴族たちと共に働かなければならないことを理解したのである。こうして県制の導入では、新しい県知事9名のうち6名は大貴族が任用され、元老院議員は「時代とともに、よりアリストクラチックになった」。元老院と宮廷で支配的であったのは名門貴族のドルゴルキー族、特にヴァシリー・ドルゴルキーとヤコヴ・ドルゴルキーであった。アレクセイがペテルブルクを離れるとき、ヤコヴの耳元で「わたしを見捨てるな」(<Pozyalui menya ne ostavi>)と囁いたとされるが、ピョートル帝が元老院の改革反対派と皇太子との繋がりに気づくのは事件後のことであった。そもそも事件後の審問のなかでウストリャーロフが公にした史料は全体の5パーセント程度で、事件に対する名門貴族の支持のあらゆる部分が省略されていたのである。ピョートル帝はここで「重大なジレンマ」に立たされた。つまり皇太子事件を一、二名の「見せしめの処罰」で打ち切るか、それとも疑わしいすべての名門貴族たちを起訴・処罰するかである。ピョートルは「安全なコース」、つまり「見せしめの処罰」の方を選んだというのがブシュコーヴィチの理解である。10年後の概説書でも、彼は改めて次のように述べた。ピョートル帝は「イヴァン雷帝を真似て、彼等すべてを処罰するか、あるいは若干名を処罰することで事件全体を最小のものとして隠すか（択一を

求められた)。ピョートルは第二の選択をした。^⑤

欧米におけるピョートル改革史研究を牽引してきたリンゼイ・ヒューズは本書を次のように高く評価した。「ピョートルの政治はエリートから大した反対をうけず、(反対が)あったとしても少しの反対を抑えた」という従来の通説に「重大な修正」をほどこした。加えて、デンマーク使節報告(1715.10)のなかに「既存の単純な継承法のために、国の安全を犠牲にすることは最大の蛮行だ」とのピョートルの発言を発見したこともブシュコーヴィチの大きな功績である。^⑥ それは同時代のフランスのルイ14世没後の王位継承に対する批判であるとともに、間もなく自らも直面する継承問題への対応を示唆する発言だからである。

註

- ① ウストリャーロフの経歴等については、Durnovtsuev, V.I, Bachinin, A.N, Pragmaticheskii byitopisateri. Nikorai Gerasimovichi Ustryalov. Istoriki Rossii. X VIII-nachalo X X veka. M., 1996参照。
- ② O sisteme pragmaticheskoi russkoi istorii. SPb., 1836 最近次の論集に収録された。Vzglyad na istoriyu kak nayky. Maroizvestnye istochniki po russkoi istoriographii (pervaya polobina XIXv.) M., 2015
- ③ Russkaya istoriya.cha.1-2 (1837), Nachertanie russkoi istorii dlya uchebnyi zavedenii. (1839)
- ④ ニコライ帝の時代について、「賛辞的な」歴史書を書いた。Istoricheskoe obozrenie gosudarya imperatora Nikolaya I. SPb., 1847
- ⑤ Istoriya tsarstvovaniya imperatora Petra Velikogo. T.1- IV, VI. SPb, 1858, 1863 (Phaksimilinoe izdanie, 2010)
- ⑥ Zirkov, G.V, Vek ophitsialnoi tsenzyryi. Ocherki russkoi kul'tury. XIX veka. T.2 Vlasti I klytyra. M., 2000 ニコライ帝自身の歴史への関心については Vyiskochikov, L.V, Nikolai I. 2003
- ⑦ 検閲が通らなかった理由は不明である。Klokman, Yu.R Neizdannyy tom <Istorii tsarstvovaniya Petra Velikogo> N.G.Ustryalova. Poltava. K 250-letiyu Poltavskogo srazeniya. Sb.st. M., 1959
- ⑧ 1872年5月にモスクワの貴族会館ではソロヴィヨフの公開講演「ピョートル大帝」が12回にわたって行なわれた。Soloviev, S.M Publichinye chteniya o Petre Belikom. M., 1872 ソロヴィヨフの高弟クリュチェフスキーは、『ロシア史講義』第4巻(1909)のなかで、「ピョートルの死から1864年にソロヴィヨフの『ロシア史』第14巻が現れるまでの140年間、改革の歴史研究のためには殆ど何も為さ

れなかった」としている。ウストリヤーロフは完全に無視されているが、クリュチェフスキーは「皇太子事件」も全く取り上げていない。外務省調査局訳（目黒書店、1945）206頁。

- ⑨ Russkaya Istoriya, 5-oe. (1855) S.81-84.
- ⑩ 「重大な結果」を招いたとするのは1722年2月の帝位継承法で、「正しい秩序」をもたらしたとするのは1797年4月の長子（女子の除外）の帝位継承法をさす。
- ⑪ Bushkovitch, P. Power and the Historian; The Case of Tsarevich Aleksei 1716-1718 and N.G. Ustrialov 1845-1859. Proceedings of the American Philosophical Society, 141-2 June, 1997 p.177-212
- ⑫ 因みにフランスでは、ウストリヤーロフの本を「参照した」歴史記念物監督官プロスペル・メリメが1864、65年のある雑誌に『皇太子アレクセイの裁判』を書いているという。高橋安光はこれをヴォルテールが書いた『ピョートル大帝治下のロシア帝国史』（1759）の第二部第10章の「皇太子アレクセイ・ペトロヴィチの断罪」と比較検討を加え、「原資料を丹念に検討したウストリヤーロフの研究成果に依拠するメリメの方が事実の記述は一層正確に違いなかった」。だが「一世紀前のヴォルテールの方が法律に対する理解や人間心理の観察ではメリメよりも一層近代的であったと思われる」と指摘している。高橋『ヴォルテールの世界』（未来社、1979）155-159頁。Voltaire, *Russia under Peter the Great*. (trans. By M.F.O.Jenkins) London, 1983
- ⑬ Mavrodin, V. Peter Pervyi. L., 1948 480S. 「改革の敵」として10頁を充てている。
- ⑭ Ocherki istorii SSSR. Rossiya v pervoi chetverti 18 v. Preobrazovaniya Petra 1. M., 1954
- ⑮ Pavrenko, N.I. (otv.redaktor) Rossiya v period peform Petra 1. M., 1973
- ⑯ Petr Pervyi. M., 1975; Ptentsui gnezda Petrova. M., 1984 Ekaterina Vekikaya. M., 1999
- ⑰ Tsarevich Aleksei. M., 2008 299S.
- ⑱ ピョートル・トルストイ（1654-1729）は皇太子事件解決の功績等で、1724年に伯爵の肩書を受けたが、ピョートル二世の即位（1727）により爵位を剥奪された。そしてソロヴェツキー修道院に幽閉され、失意のうちに世を去った。爵位が戻ったのは女帝エリザヴェータの治世で、トルストイ家の当主はアンドレイ・イヴァノヴィチであった。アンドレイは作家レフ・トルストイの曾祖父にあたる。Tolstoy, Nikolai *The Tolstoys. Twenty-Four Generations of Russian History 1353-1983*, New York 1983
- ⑲ 伊太利の巡礼地バーリについては、ヤコブス・デ・ウォラギネ、前田敬作・今村孝訳『黄金伝説』第一巻（人文書院、1979）のなかの「聖ニコラウス」57-72頁、参照。聖ニコラはロシアで最も人気のある聖人であった。
- ⑳ 1718年5月16日付けのアレクセイの証言。彼はヤコヴの耳元で「どうか私を見捨てるな」（Pozyalyi menya ne ostavi）, と言った。Ystoriyalov, S.509 No.173
- ㉑ ヴァシリー・ウラジーミロヴィチ・ドルゴルキー（1667-1746）はアレクセイ事件で失寵、すべての肩書と領地を奪われてカザンに追放された。1724年に赦されてペテルブルクに戻り、大帝の死後ロシア軍の指揮官に任用された。また彼の姪が皇帝ピョートル二世のフィアンセとなり、彼自身は宮廷で影響力を揮い、最高枢密院のメンバーになるも、女帝アンナの即位で再び失寵・逮捕された。赦されたのは1742年のことで、陸軍参議会の長官になるが、4年後に亡

くなった。他方で一族の長老ヤコヴ・フョードロヴィチ（1639-1720）はヴァシリイの従弟にあたるが、皇太子事件後まもなく世を去った。

- ⑳ Byshukovichi, P Mne otmshchenie ... Novyi vzuglyad na delo tsuarevicha Alekseya. Rodina. 1999 No.9 S.43-47.
- ㉑ Kpyilova, T.K Aleksandrov, V.A Boriba s reaktivnoi oppozitsiei.
- ㉒ Bushkovitch, P Peter the Great. The Struggle for Power, 1671-1725. Cambridge UP, 2001 本書のロシア語訳が2008年に刊行されている。
- ㉓ Bushkovitch, P A Concise History of Russia. Cambridge UP, 2012 p.
- ㉔ Hughes, L Russia in the Age of Peter the Great. Yale UP 1998及びSEER, 81-1, June, 2003 pp.139-140. 他方で、彼女はこの時代の「女性、農民、建築物、戦い、儀式、宗教、歴史学、神話、そして伝統、ピョートル自身の余暇と情熱について知りたい読者は他の書物を見なければならないだろう」、と述べて事件中心の本書の構成に対してはいささか不満を表明している。ヒューズはピョートル改革にジェンダーの視点を入れた最初の歴史家でもあったが、2007年58歳の若さで亡くなった。

本稿は2013年度のロシア史研究会大会の共通論題「歴史のなかのロマノフ朝再考」の報告原稿を増補したものである。報告では時間の制約のため省略した部分を復元するとともに、改めて整理し直した。但し報告後の新しい文献は未見である。